



ネットいじめの実態

ネットいじめは、どの程度、発生しているのだろうか。私たちが2015年に京都府と滋賀県の高等学校98校、66,399人を対象に実施した調査では、高校生の8.7%が「ネットを介してイヤな思いをしたことがある」と回答した(高校入学後に限定すれば5.4%)。その内訳は、「twitterによる誹謗中傷」(51.8%)や「LINEでの誹謗中傷」(39.7%)が中心となる。かつて多かった「メールでの誹謗中傷」(18.4%)や「ブログ・プロフでの誹謗中傷」(19.0%)は減っている。「写真や動画」(9.7%)や「学校裏サイト」(3.9%)もあった。

高校生のネットいじめの3つの特徴

1つめは、被害者に対する事実無根の嘘や個人情報、加害者に明確な悪意の自覚がないまま、笑いなどの「ネタ」としてネット上にさらされてしまうことである。被害者は不特定多数に見られることで、周囲から孤立したり、好奇心な視線で見られたりする苦痛がある。最近では、いじめとの境界線があいまいな「いじり」が、子どもたちの粗野なコミュニケーションの一手段として顕著になってきたが、ネットでもそうした関係が蔓延し始めている。

2つめは、被害者の86.1%が「書き込みを誰が書いたか特定できた」と回答し、「匿名性」が薄らいでいることである。ネットいじめの被害者と加害者の間には一定の人間関係が存在する場合が多い。仲間内のコミュニケーションから被害者がネット空間に誘われ、それに同調しなければ仲間でないような圧力を感じる。あるいは、自分がネットいじめの対象とされることへの恐怖心から、集団に過度に同調してしまう。希薄な友人関係を基盤とした集団では、あるときは被害者であっても、集団に同調する意識から容易に加害者になり得る。

表1

高校生を対象とした大規模調査の概要

●京都府および滋賀県の高等学校98校66,399名
調査方法: 自記式質問紙調査法、HR時などに実施・回収
調査期間: 2015年5月～2016年3月

	1年	2年	3年	男性	女性	京都	滋賀	公立	私立
n	26,754	22,764	15,964	34,256	30,955	51,000	15,399	49,149	17,250
%	40.9	34.7	24.4	52.5	47.5	76.8	23.2	74.0	26.0

	偏差値 40以下	偏差値 41-45	偏差値 46-50	偏差値 51-55	偏差値 56-60	偏差値 61-65	偏差値 66以上
学校数	15	23	18	19	15	3	6
n	6,005	13,131	11,704	12,872	11,406	3,251	8,030
%	9.0	19.8	17.6	19.4	17.2	4.9	12.1

※『高校受験ガイドブック 平成29年度私立・公立受験用(関西版)』(2016)所収の偏差値一覧に依る

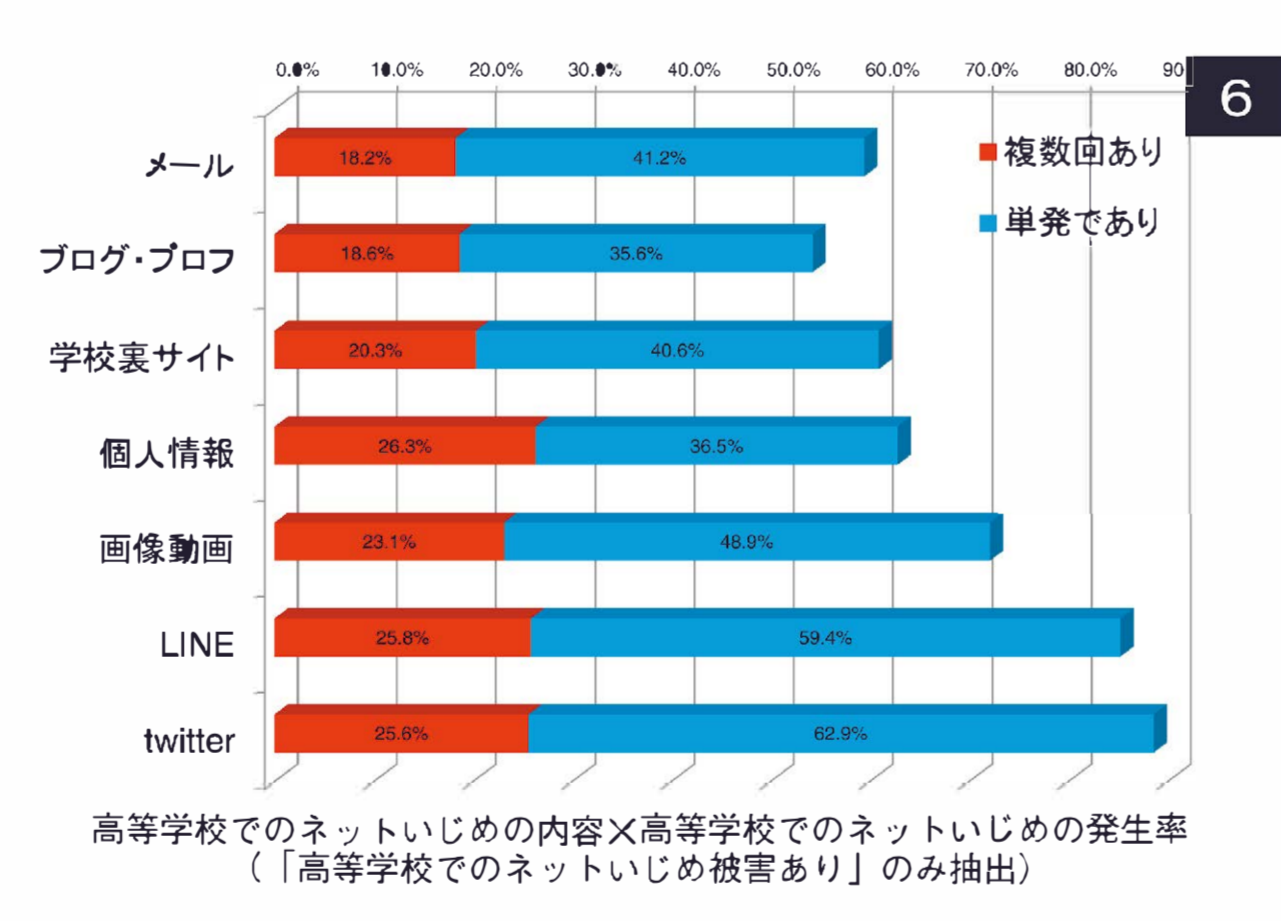


図1

3つめは、現実世界でのいじめがネット空間にも転じやすいことである。リアルないじめ(「ひやかし、からかい、悪口」「仲間外れ、無視」「殴られる、金銭をたかれる」)を受けた経験のある生徒ほどネットいじめの被害に遭う割合が高い。両者の相関関係は強く、ネットいじめはリアルないじめと同一線上で発生している。

学力とネットいじめとの関係

グラフは縦軸にネットいじめの発生率、横軸に学校の偏差値とし、98校をクロス集計した。発生率が最も高いのは偏差値が最も低い学校群(①)だが、必ずしも偏差値に沿って右肩下がりにはなっていない。偏差値66超の学力高位群(②)でもネットいじめは発生しやすく、偏差値51~55の学力中位群(③)の発生率も高い。全体ではWの波形になる。

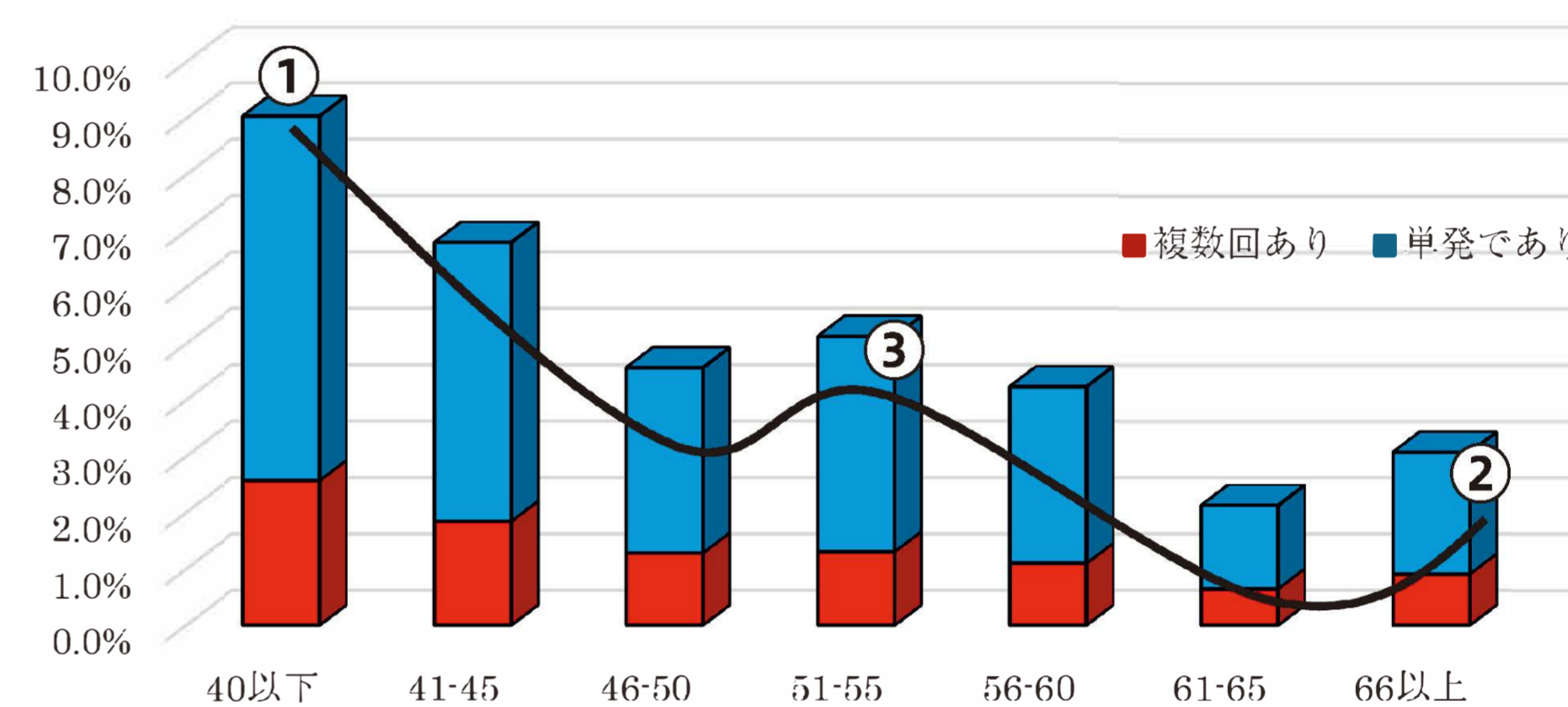


図2 高等学校の学力階層とネットいじめの発生件数
※偏差値は公示されたものではなく、『高校受験ガイドブック 平成29年度私立・公立受験用(関西版)』(2016)所収の偏差値に依った。

その背景を分析すると、学力層によってネットいじめの特徴が異なっていることが分かる。①の低位群は「直接型」が他と比べると多いのに対して(既読無視をしたことがある①63.1%>②55.1%)、高位群の②は「笑い」を伴う「間接型」が起こりやすい(twitterによる誹謗中傷①44.8%<②54.5%)。③の中位群は、学力の分散が最も大きく、多様な価値観の葛藤があると考えられる。自分と考え方や価値観が異なる「異質な他者」が混在しやすい空間にはネットいじめが発生しやすい。

学力という切り口だけでも、学校ごとにネットいじめの特質が異なるということは、それぞれに見合う対策も異なるということだ。

例えば、③の学力中位群には、人権の視点から見ても、人間の多様性への理解やつながりへの寛容がもっとも高く求められるべきであろう。実際、その理解の上に立ち、大きな抑止成果をあげている学校もある。「ネットのことはわからない」「ネットは子どもの問題」とせずに、ネットいじめという新たな教育課題の実態の把握につとめ、それぞれの学校の実態に合わせた対策が求められている。(2017年3月20日 日経新聞記事より抜粋)

※科学研究費採択 基盤研究(B)成果

新聞記事



日経新聞
2017年3月20日

刊行物



ネットいじめはなぜ「痛い」のか
(ミネルヴァ書房)
原 清治 編著
山内 乾史 編著
2011年10月

「ネットいじめ」の問題について、子どもたちの人間関係を含めたいじめの背景・要因や問題点を明らかにし、現実的な対応策を探る。



研究テーマ
ネットいじめの構造と学力との因果関係

最近の業績

- 『第6章第1節 いじめ問題』西岡加名恵編著／高見茂・田中耕治・矢野智司監修『教職教養講座第7巻特別活動と生活指導』共著、2017年、pp.154-167
- 『学校インターンシップの科学』共著 ナカニシヤ出版 2016.3
- 『比較教育社会学へのイマージュ』共著 学文社 2016.8

専門分野
教育社会学、学校病理、教師教育

科学研究費採択

- 挑戦的研究(萌芽)17K18677「ネットいじめの国際比較—世界共通質問紙作成の挑戦—」2017-2019 研究代表者
- 基盤研究(B)15H03491「ネットいじめの構造とそれに対する実証的研究」2015-2019 研究代表者

受賞実績
第67回教育功労者表彰

個人のホームページアドレス
<http://haralabo.com/>

<http://www.bukkyo-u.ac.jp/about/teachers/detail/89/>